ひとり寝

今東光

今東光ひとり語り

中公文庫

中央公論社

© 1962

ひとり寝

著者 今東光

昭和37年6月10日印刷
昭和37年6月20日発行

発行者 宮本信太郎

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二の一
電話 (561) 5921—9
振替東京34番

定価 320 円

検印廃止

ひとり寝

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

のぞき見

……またラジオから流れてくるのがベートーヴェンのピアノ協奏曲第三番ハ短調作品三十七、強い歯切れのよいタッチで弾きこなしているのは、言うまでもなくルビンシュタインに相違ない。

毎朝、窓から吹いてくる涼風のように朝の名曲が送りこまれる。それを聞くと意識の方が先に目を覚ますが、瞼はできるだけゆっくりと後から開くことにしていた。

（もう少し寝ていたい――）

と思うのだが、この家に越して来て以来、毎朝欠かすことなく、何所からか聞えて来る朝の名曲で起されるのだ。

昨夜から開け放しの窓にかけてあるレースのカーテンは時折り朝風にまくれて、ふわりと孕（はら）む。その度にちらりと煌（きら）めくような青空がのぞいていた。

この下宿屋は木造の粗末な外見のわりに、二階の六畳は壁も塗り変え、畳も新しいせいか、思いのほか清潔に見える。置いてあるのは箪笥、鏡台、机、食卓、それに脱ぎ捨てた浴衣をかけた衣桁（こうが）、いかにも女部屋らしい諸道具の間に、ふわりとした二枚の敷蒲団に麻模様の夏蒲団をかけ、真白なシーツが目に痛い。

何度も寝返りを打ったとみえて、いつの間にかその薄い夏蒲団を剥いでしまって、すらりとした長身をながながと横たえていた女の寝巻の裾がまくれ、艶やかな白い二本の脚の間から房々した黒い陰影が息づいていた。

扉に鍵をかけてあるので、その若い女はそのままの姿勢で急いで寝乱れた裾をなおそうともしないで、おもむろに片足の膝を立てた。膝の後がじっとりと早や汗ばんでいた。今日もまた暑い日がつづくのであろう。彼女はまくれあがった下腹部のあたりへ寝巻を巻きつけるようにして、やっと半身を起し、もう一度、ルビンシュタインをよく聴こうとした途端、カーテンの間から狭い通路をへだてた向い側の二階から、急いで身を引いた影法師を素早くとらえることが出来た。

「あら。のぞいてたんだわ」

独り言をいいながら舌打ちした。あられもない寝相（ねぞう）を見られたかと思うと、流石に顔が赤らんでくる。曽根多美が、この下宿へ引越して来た時、たしかに窓の向う側の薄汚い家の二階の廊下に、のっそりと髪を長くした青白い青年が佇んで、引越し車から荷物をおろし、やがてこの部屋に運

ぶのを、何の感動もなく見ているのに気がついたことだった。その家の伜か、それとも自分と同じように下宿している男かわからなかったが、その家の裏塀にあたる黒く塗った板塀に、半紙ぐらいの大きさの紙に「月やく薬」と墨の香もするように書いて貼ってあるのが眺らしかった。

このような下宿の一室を観察していると、まるで人生の縮図を見ているような気でもするのではあるまいか。

さまざまの故郷を持っている人間が移って来たかと思うと去って行き、去ったかと思うと踵を接して引越してくる。それはまるで波のようなもので、或る一定の時期に行ったり来たりするのだろう。今日もまた一人の若い女性が引越して来たが、そこにどんな生活が展開するのかも知らないで、その硝子玉のような目玉は、何の感情をも反映しないで茫然として眺めているのだ。あるいは自分などに何の注意を払うでもなく、まったく無感動に狭い往来を眺めていたのかもしれなかった。隣りの家の疝気まで病んでいては東京などに住んでいられない。

しかしながら今朝は違う。

たしかに今朝は意識してのぞいていたし、のぞくことに興味のあるのぞき方をしていたようだ。考えてみればあの若い男にとっては、のぞくに値したほど充分に興味ある風景だったに違いない。幅のひろい蒲団に若い女が下腹部を露出させて静かに横たわっている図は、誰だって好奇心を起すだろう。まして若い男にとっては好ましい構図ではあるまいか。

そうは思うものの、人の不意をねらって、しみじみとのぞき見していたかと思うと、下司の垣間見ということばも思い出されて舌打ちしたいくらい腹立たしい。顔を合せてバツが悪いから隠れたのかもしれないが、それにしても、朝早くから女部屋に注意を注いでのぞいていたとは怪しからぬ男だと思った。

ただ彼の部屋からか、それとも別の家のか知らないが、毎朝のラジオは楽しかった。殊に今朝のようにルビンシュタインと明らかに感じられるような名手によって奏せられるピアノの音で目が覚めると、暫らくはそのままの姿勢で身動きしたくない。そこをのぞかれていたのだった。

彼女にとってはベートーヴェンは少しばかり刺激が強いと思われた。ところがピアノの協奏曲のようなものだと、ベートーヴェンも、交響楽などに見られるような迫力の強いものばかりではなく、そぞろに心の浮き立つような快適なものがあった。

この協奏曲第三番ハ短調は一八〇三年四月五日にアン・デア・ウィーン劇場で初めて演奏されたが、ピアノの部分は作曲者のベートーヴェン自身が受け持ったという記念す

べき演奏会だった。

作曲者に好意を持ったリヒノフスキー公爵は、練習中もずっと立会って介添えしたが、厳格なベートーヴェンは演奏会当日の練習を朝の八時から開始し、二時間半にわたっても、飲まず食わずに熱心に練習をするので、音楽師たちはへとへとに疲れてしまった。公は見るに見かねて葡萄酒やコールミートなどを持ち出させたので楽師達はやっと元気を恢復したと伝えられている。こんな些細なところにも偉大な楽匠の性格の片鱗がうかがえるのであった。

一八〇三年四月五日の公演はピアニストとしてのベートーヴェンを大いに価値あらしめたが、当時の人々にはこの作品の真価がわからなかった。音楽評論家などという者も本当には何にもわかってはいなかったのだ。彼等はベートーヴェンの奏法が優れていたということだけに関心を寄せて、この作品は第一及び第二の協奏曲と違って、すなわち彼の初期の作風から脱却して、実は次の時代に踏み入ったという転期さえ理解することが出来なかったのである。大抵の場合、批評家というものは芸術家が生存中には、その真実の価値をとらえることが出来ないものだ。死んでから、やっとこさ解りかけ、惜しい芸術家を喪ったなどとほざくものなのだ。ベートーヴェンはこれ等の凡庸な批評家の間で、絶えず自分が孤独だということを感じなければならなかった。

彼女は朝っぱらから、自分のあられもないところをのぞかれたということで、すっかり気を悪くした。

けれども考えてみれば、彼は実は何にも知ってはいないのだ。若い一人の女性が、少しばかり寝相を悪くして、陰しどころを露出させたからといって、彼女のすべてをさらけ出したことにはならない。もっと大切な心の奥にしまい込んだものは、誰にものぞかれていないではないか。

これは、まるでベートーヴェンと同じではなかったか。あの向いの二階に住んでいる若い男は、たしかに好奇心の強い批評家みたいな奴だ。根掘り葉掘り興味のおもむくままに、一枚、一枚と剥がして、七枚下の秘所をまで無遠慮にのぞきたがるくせに、実は全体については何にも知ろうともしなければ、知らないのだ。

（あの硝子玉に映るものなんか――）

と、べっと唾をして彼女は彼のことを忘れようとつとめた。

今夜からは窓を閉めて寝よう。明日の朝はのぞかれる気遣いはない。そうは思うのだが、夜になってもまだ昼間の火照りが残り、肌襦袢一枚になっても総身の毛穴からふつふつと汗が吹き出してくると、まるで室のようなこの西洋館風の二階家の暑さはやりきれない。たまらなくなってどの窓もすっかり開け放ってそのまま床に身体を横たえると、

少しばかり、あるかなきかの夜風が吹き込んで来て漸く眠れる有様だ。

昨夜、二階の屋上にある物乾し場に上り、きらめく星空の下で襟もとをくつろげると、思いなしか熟れたような体臭が鼻先をかすめた。くすりと独り笑いをして肩をすぼめ、いつまでも真暗な夜空の下で涼を取ってから部屋に戻ると、まるで蒸し風呂の感じだった。

この部屋も貧乏世帯の生家にくらべると、部屋代も高いし、小綺麗だし、環境さえ悪くなかったが、生家の方が風通しがよかった。この部屋に移って来た時は、本当に有難いと思い、また嬉しかった。前の泥沼のような部屋から出ることが出来ただけで充分に満足した。

何の欠点もないと思っていたのに、意外な眼が彼女の生活をのぞいていたばかりでなく、彼にさえも見せない秘所までありありと見られたということは千秋の恨事だった。

彼女は階下の湯殿で顔を洗い、すっかり爽やかな気分になった。

「お早うございます」

「あら。お早うございます。曽根さん。新聞が来てますよ」

下宿のおかみさんは肥った身体を運んで、新聞を取ってくれた。あまり新聞を見たい興味はないのだが、この夕刊紙は花柳記事がおもしろいので取ってもらったが、昨夜から配達されているのを知らなかった。

「どうも有難う」

新聞と洗面道具を持って部屋に戻ると、手早く朝食の仕度をした。朝はパンと牛乳とオムレツにした。これも意識して生活を変えようとしているうちに、いつの間にか嗜好まで変って来たらしい

「あ。そうだ」

彼女は食事中に洗濯物を取り込むのを忘れていたのを思い出した。食事が終って、寝巻のままが少し気が引けたが、屋上の物乾し台に上って行った。竿にかけたシュミーズを取り入れながら、ふと首を廻すと、はるか上野の森のあたりまで眺められ、鬱蒼とした緑の濃い中に東照宮の五重塔の屋根がかすかに指呼される。本郷もこの辺は高台なので、小石川の台地も展望されるのだ。

ふと目の下を見下すと、向いの家の若い男が、また二階の欄干のところから自分の部屋をのぞいているのだ。

「厭な奴……」

この時ばかりは、まったく物乾し場からバケツの水でもぶっかけてやりたいと思った。まさか自分が屋上にいるとは気がつかず、見るような見ないような振りをして、あきらかに自分の部屋の窓をのぞいているのだ。人間というものは奇妙なもので、あまり自分の目の高さ以上のものを見

ないものだ。座敷に入っても天井を見ないように、彼は自分が屋上から観察されているのに気がつかないのだ。

バケツの音に気がついて、その男は眼を挙げた。

彼女は、憎たらしいので、彼に気がつかないような風をして小石川の台地につらなる家並みに眼を遊ばせていると、その男が手を挙げて合図をしている。それでも素知らぬ振りをしていると、その手が頻りに早く動きだした。

「何ですか」

と言わんばかりに、はじめてこの無礼な男に目を注ぐと、その男の指が屋根の上をさしている。そこへ眼をやると、一枚の白いハンケチが瓦の上に落ちていた。

「どうも有難う」

と言う風に頭を二、三度下げると、彼女は物乾し竿で拾いあげた。

すると若い男の姿はもうなかった。

つまり洗濯物が屋根に落ちているのを知らせると、もう自分の役目が終ったというように行って仕舞ったのだ。

自分の肉体の一部をのぞき見された男と、顔を合せ、口をきくというのは、何とも言いようなく恥しい。彼の方もきっとそうなのだろうと考えた。それゆえに彼女を避けるように引込んでしまったのだろう。それにしても屋根にハンケチが落ちているというのを気づいたというのは、自分の部屋をのぞく気にならなければ気づかないことだ。いずれにしても虫の好かない奴に相違ない。

身仕度をして出かけようと玄関に行くと、おかみさんが、

「うちじゃいらないよ」

と大きな声で断っていた。

玄関に八丈島の風俗をした女が立っていた。椿油を売りに来たのだ。

「お客さん。買って下さい」

と椿油売りが多美に頼んだ。

「いらないったらさ。当節はこのようなお若い方は、椿油なんか使わないよ」

「だって椿油の天婦羅は上等なんだよ。旦那様にひとつ食べさせておあげなさいよ」

「このお方は旦那様が無いんだよ」

「あら。あたしと同じだね」

「ふん」

おかみさんに、きっぱり断られると、椿油売りは、くるりと背を向けて出て行った。

「ひつこいっちゃありゃしない」

「何ですの」

「椿油売りですよ」

「そうらしいでしたね」

「いっぺん買ってやったら、ちょいちょい、来るんですよ」
「そりゃそうでしょうねえ。好いお得意だと思って」
「とんでもない。油を切らしたところだったんで、あんまり髪の毛がぼさぼさして見っともないから、ほら、こんな赤っ茶けた毛でしょう、櫛の歯も通らないんじゃ始末が悪いんで、買ってやったら好い気になって」
「あのくらい心臓でなくちゃ売れないんでしょうねえ」
「まったくさね」
おかみさんは短い両腕を腰のところに突っかえて、少し股を開き加減に立ちはだかっている。肥っているので股擦れがするのであろう。
「心臓ってば、あの連中は相当なもんですよ。この先に紙屋さんがあるでしょう」
「え。あたしも塵紙を買いましたわ」
「あの紙屋の親父ったら、おかみさんに死なれて、ひと頃はやもめで暮してましたのさ、何しろ三人もの子持ちでしょう。ちょっくら嫁の来てがありゃしませんもの」
「後妻さんだって大変でしょうからね」
「先妻の子が三人もある家なんかに、当節、後妻に来る女なんてありゃしませんよ。うちの人も、好い人があったら世話してくれなんてね、すっかり頼まれたんで、こっちはおっちょこちょいだから方々、心当りを尋ねていたんでさ」
「まあ。御親切に」
「まったくさ。するとね。あの親父ったら、いつの間にか八丈島の油売りとねんごろになって、うちの人が奔り回ってた時にゃ、もう、家の中にひきずり込んで、ちん鴨で、同棲してたじゃありませんか」
「あきれたわ」
「ほんとに男って、あきれたもんじゃありませんか。いくら後妻がほしいったって、あなた、氏素姓もわからない女をひきずり込んで、何の挨拶もないんですよ」
「まあ。するとお店に坐ってるおかみさんは」
「はい。八丈島の女ですよ」
「へえ」
「手拭を姐さん冠りにして、椿油を売り歩いてた女でさ。だけど変じゃありませんか。独り男のところに椿油を売りに行ったのは」
「そうですわね」
「何を売って歩いてたんだかわかりゃしませんよ。あの女は」
「そうでしょうねえ」
「まったく男は性悪だから」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「男ってば、お向いの二階のお方は」
「あ。ありゃ絵描きさんだって。ちっとも売れない絵描きですよ」
「今朝、あたしのハンケチ、屋根に飛んでたのを知らせてくれましたのよ」
「へえ。厭に親切だね」
「そうでしょうか」
「いえ。親切ったって、曽根さんがお美しいから、口でもききたくってうずうずしてたんでしょう」
「まさか」
「自分で拾ってとどけてくれりゃ。もっと親切なのにねえ」
おかみさんは歯ぐきを露わして好色的に笑った。
多美はあの男の素姓の一端を知ったことで満足して出かけて行った。

会社の会話

ラッシュアワーの電車に揺られ、折角、結った髪が台無しになる朝夕を勤めに出るのは、まだ親の家にいた頃からの習慣だが、それというのも継母との折合いが悪く女学校さえ満足に出られないのではないかと思ったことが屢々あったので、卒業と同時に会社勤めをするようになった。
幸に三年先輩が結婚するために欠員を生じ、誰か然るべき人を推薦しなくてはならなくなり、女学校時代からSとか何とかからかわれた下級生の曽根多美が卒業して職を探していたので、文句無しに推薦して自分の後釜に据えてくれたのだ。
南京豆や胡麻や綿の実を搾取する会社と聞いて、地味で野暮な会社だとは思ったが、今の多美には贅沢は言っていられない。人間から膏血を搾る会社でも咽喉から手の出るほど勤め口を欲していた際なので、多美は一も二もなくその勤め口に飛びついた。
会社の事務員になったものの何にも仕事らしい仕事がなかった。妙な会社だとは思ったが、社長や専務が出社すると、その部屋に行って外套を脱がしたり、お茶を運んだり、その他は同僚の女事務員と雑談をしているきりで、こんなことで月給を貰うのは勿体ないと思うのであった。
「あんた。うちの工場に行ったことあるの」
と仲間に聞くと、
「何でも埼玉県の川口ってところにあるそうだわ」

という返事で、彼女等は一度も工場に行ったことはなかった口振りだった。
「そう。川口なの。彼所なら一度あたし行ったことあるわ」
「そう。どんなところ」
「大きな川のある町よ」
「どうしてそんな所知ってるの」
「あたしのお友達のお父さんの工場があったのよ」
「工場見学にいらしたの」
「そうじゃないわ。そのお友達と赤羽の方に遠足して、ついでにうちの工場があるから寄りましょうって寄ったのよ」
「へえ」
「鋳物工場など多い町で、お友達の工場は索道会社なのよ。日本に五つぐらいしかない珍しい会社なんですって」
「まあ。索道会社なんて仕事になるのかしら」
「なるわよ。鉱山などは索道がなくっちゃ仕事にならないじゃないの。鉱石を運び出すのは主に索道を使うじゃない」
誰も自分の勤めている会社の工場に対して関心さえ持っていないということは一体どういうことなのだろう。
社長の長島は滅多に出社しなかった。細面の痩せた紳士で、いつも痔で悩んでいた。会計の横田は十露盤が達者なだけに、専務の御機嫌を取るのが巧かった。この専務というのはまだ若い男で、年輩からいったら一会社の専務などという柄ではないが、社長の甥だとかいうので重要な椅子に就いていた。貫禄の無い男のくせに、どこか陰険なところがあったのが気にかかった。
専務は毎日出社したが、格別これという仕事もなく、いつも何人かの来客とゆっくり話し込んでいた。多美はこの会社に勤めて、いつまで経っても工場長という人物を見たこともなければ、工場管理の常務にも会ったことはなかった。
多美が勤めて暫らく経つと、一見してブローカーみたいに見える男が訪ねて来た。鼻の下にちょび髭を生やし、まるで鼠みたいにこせこせした大阪生れで、上方訛りを丸出しにして喋った。
「今日は。エヘヘ……好えお天気さんだんな。皆さんお揃いで結構なこっちゃ。時に専務さんいやはりまっか」
べらべらやりながら勝手に次の間の扉を押し開ける図々しさだ。
この男が来ると専務はどの客に対するよりも横柄なくせに、何か頭が上らないみたいに決して追い出そうとしないのだ。
「急所を握られてんのじゃない」

と事務の大井千代子が言った。彼女はこのブローカーを毛嫌いしていたから、専務の態度をそんな風に観察していた。

たしかにこの批評と観察は当っていたように思う。

もう一人の浅黒い顔に面胞を吹き出していた池田はつ子は、多美を、

「専務に気をつけなくちゃ駄目よ。あのブローカーの奴が、けしかけてたから」

と重大な警告をしてくれた。

「まあ。そう」

「そうなのよ。あたしがお茶を持ってったら、彼奴は専務にあの曽根さんはおいしい盛りだんなって言ってやがんの」

「へえ。そんなこと言ってるの」

「すると専務ったらにやにやしながら、わかってるよって答えて、あたしがいるもんだから黙ってしまったけど」

「それが大阪流のおべんちゃらっていうんだわ」

「そりゃ誰だっておべっかされて悪い気持ちはしないだろうけれど、彼奴ときたらたまらないわ」

「不潔な奴ね」

二人の同僚は躍起になって怒っていた。怒っていたのは、彼が、彼女等を見る目が厭らしい角度から見ているのがわかるからだ。

そればかりじゃないことは多美は知っていた。たしかに専務は多美には格別、猫撫で声を出して親切にしてくれたが、彼とブローカーとの話は、実はそんな生やさしいものではなかった。入社してまだ日の浅い多美なので少しぐらい聞かれても平気だと言わんばかりの面をして、ブローカーは専務に会う度に言うのだ。

「あの田辺の工場を買収しなはれ。ほんまに買収するんやったら、今がチャンスだっせ。悪いことは言いまへん」

「まだ考え中なんだよ。そんなに焦るなよ」

「焦るないうたかて、向うは今が一番懐の苦しい時だんね。それがわてにようく解ってるさかいにすすめてまんねやで」

「社長は少し遠過ぎるんで二の足を踏んでるんだよ」

「何が遠うまんねや。大阪まで行てしもたら、直きだっしゃないか。天王寺駅から紀勢西線に乗らはったら訳おまへん。白浜ちゅう温泉場を控えてまっしゃろ。今に白浜行の特別列車が出るようになるのは目に見えてま。彼所は大阪の金持ちの遊び場になりまっせ。わてに銭あったら今のうちに土地買うて大儲けしたい思うてまんねや」

「そりゃ確かにそうなるだろう」

「なりまっくらい。白浜から、ほん目の前の対岸が田辺市だっさ。その田辺には時折り駆逐艦や潜航艇が入港してま

んね。良港だんな」
「いつか三万五千石を貰ったっけね」
「へえ。ありゃ名菓だっせ。おいしましたやろ。流石に御三家の紀州藩の家老安藤さんの三万五千石の御城下だけに、洒落た菓子を作りまんね。どうだす。いっぺん御一緒しまほか。何ちゅうたかて一度、工場を御らんにならなあきまへん。ついでに白浜へお供しますさかいに」
「ハハ……うまく口説くね」
「いえ。ほんまだす。白浜ちゅうようなとこは滅多におまへん。たった大阪から三時間あまりで行けまんねさかいな」
「そんな近いかね」
「直きだんがな。日本三温泉として知られた白浜へ、たった三時間だっせ」
「うん。行ってみたいんだがね」
「伊予の道後、摂津の有馬、それにつづいて『牟婁のいで湯』として知られた湯崎温泉ちゅうのが、今日の白浜だんね」
「くわしいね」
「そりゃ生れ故郷に近い温泉だんねや。くわしいのが当り前だっさ。白良浜ちゅうて、まったく目ェまぶしゅうなるような綺麗な白い浜辺を伝わって行くと、『崎の湯』ちゅうのは海に突き出した岩窟の中でこんこんと湧いてまんねや。湯崎七湯というくらいで、海を見晴しながら野天で温泉に入ってると。ひぇっ、可愛い女の児と混浴がでけまんねで」
「へえ。昼間でもかい」
「朝でも昼でも夜さりでも。かもてまっかいな。ちらちら女の児の裸を眺めながら、お湯につかってるので何とも言えまへんな」
「おい。おい。田辺の話は何所へ行ったんだい。君の話はとかく艶っぽくなるんでね」
「イヒヒ……専務さんかてお嫌いやないくせに。ほんまにあんさん東京から田辺の工場に一ヵ月に一度ぐらいずつ出張しやはって、お泊りは対岸の白浜温泉。こんな結構な事業ておまへんやないか」
「遊心勃々だね」
「そだっしゃろ。まして田辺のあの工場は、あの辺に一つしかおまへんね。競争相手無しだァ。和歌山の県庁でも指定工場にするのは、ちょっと鼻薬嗅がしたらべっちょおまへん」
「大丈夫かね」
「昔から言いまっしゃろ。役人は握々がお好きてな。袖の下もらわん役人は世界におまへん。あんさんがあの工場を

買収しやはったら、わては半日で指定を取ってみせまっさ」
「そりゃ県の指定を取れたら、まるで独占事業みたいだからな」
「そりゃ言うまでもおまへん、何ちゅうたかて日本に和歌山県にしかおまへんねさかいな」
「それが巧くいくかね」
「うまくいくもいかんもおまへん。あの工場を手に入れて搾油するかたわら、あれを宣伝して県下に植えさせたらよろし」
「そりゃそうするより仕方がないが、そんな大規模のことを小さな一会社がやるということは、ちょっと困難だよ。第一、社長の身体があれだろう、十年計画と聞いただけで、気乗りしないと思うんだ」
「結局は、あんさんが乗り出さなあきまへん。十年計画の大事業が実ったら、あんさんは日本屈指の大金持ちでんな」
「そりゃ確かにそうだ。うまくいきさえすればね」
「まだ、あんなこと言うてはる。あっちゃの方は大丈夫だ。何しろ県の農林課でも、この和歌山県しか無いもんを、うんと奨励しようとは言うてまんね。ただ役人仕事ちゅうもんは予算でやることですよってな。傍から見とったら歯がゆいったらしゅうおまんね。せやけど彼の連中も、何とか実業家が乗り出してやってくれたら、こちらも力瘤を入れ甲斐があるいうてまんね」
「そりゃそうだろうね。彼等もただ漫然と農家にすすめるわけにもいくまいからね」
「そこだんねや。先方さんの言うてるのは、こないなことは官民協力せなあかんて」
「そうさ」
「そこが付け目だんね。こちらがあの工場を手に入れたちゅうたら、直ぐ土地の新聞に大々的に出まっしゃろ。いよいよ東京の財閥が乗り出して、本腰入れて田辺の工場を買収し、大いに整備拡張して搾油することになった。就いては県下の農家は、こぞってこれを栽培し、他県へも苗木と、売り出すくらいにしたら、利益は数倍になる、とこれ、県庁の発表ということにしたら、どないなると思いはる。成功疑い無しやおまへんか」
「当然そう持って行きたいところさ」
「ところがやね」
とブローカーは声をひそめて囁くのである。
「あの工場は、ほんまに好え工場だっせ。何しろまだ新しゅうまっしゃろ。機械入れたばっかりで、おやっさん、ぼくりといきましたがな。とても工場なんてもんは後家はん

の手には負えまへん」
「工場に人は沢山いるの」
「そんなもん要りまっかいな。忙しい時だけ臨時工を入れるだけで、工場長ちゅうのがおとなしい、真面目な男でな。女房より女児知らんような男でんね」
「へえ。今どきそんな男がいるのかね」
「そうだんね。奇蹟みたいなもんだんな。わては此奴にちょくちょく会うたびにおごってやって飲ましてまんねで」
「そりゃすまんね。その勘定も工場買収費に入ってるんだろう」
「そりゃそのくらい頂かんと合いまへんな。なんでわてがこの工場長を飲ましてると思いなはる」
「さあねえ」
「此奴に極道をおぼえさして、後家はんとくっつけたろう思うてまんね」
「おい、おい。冗談言っちゃいけないよ。その未亡人と工場長をくっつけたら、二人で協力して工場を再開していくじゃないか」
「そうはなりまへん。工場長には女房も子もおます。いつかは女房の耳にも入るやろし、目にもつきまんがな。そないなったら黙ってる気遣いおまへん。後家はんの方かて、あの土地の名家が親戚だすよってな。わがの使うてる男と浮気するようなことが知れたら大騒動でっさ」
「それで工場が潰れるというわけか」
「へえ。そうだす」
「だけど二人がくっつかなかったらどうなるんだい」
「阿呆らしい。くっつくのは時間の問題だす」
「へえ。そんな仲かい」
「えろう仲がよろしまんね。死んだ旦那と年が離れてましたさかい、自分とほぼ同年ぐらいの工場長の若い逞ましい身体見てるとたまらんのと違いまっか」
「猫の前の鰹節だね」
「そうだんねや。あの後家はんなら、わてかて口説きとうなる」
「そんな好い女かい」
「まあ買収に行て、お話ししておみやす。何なら工場ぐち後家はんと抱き合せでお買いやすな」
「ひどい奴だね」
「これは冗談でっけどな」
何を栽培し、何の工場だかわからないが、この会社に来て工場の話を耳にしたのは、この柄の悪いブローカーが出入して専務と話をしてからだ。
「ひどい話をしてるわ」
と多美は驚いて話した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.